

## 第九回日蓮宗化学研究発表大会

## 『伝わるからだ』の探求

— 信行会としてのこころみ —

釋 一 祐

## ☆ことばとはなにか

ことばには二つの経路があります。一つは情報伝達としてのことばで、人々の間で何千何万回と使われ、また何らかの約束事の共有によって用いている「符号的<sup>※注2</sup>ことば」。もう一つは根源的体験及びその連鎖によって表現してくる「象徴的<sup>※注3</sup>ことば」、これは思念を形にするというよりむしろことばから思念が実現しはじめ、その思念が顕われつつ形成されたことばによって他者と同じ思念を実現せしめることばです。この二つのことばにおける差異は「思考と行動が連動<sup>※注4</sup>するか否か」であり、また「まこと<sup>※注5</sup>の意(こころ)をとまなうや否や」であります。まずはじめにこのことを前提として申し上げます。

私の名字でもある「釋」は音読みでは「シヤク」、やまとことばでは「ほどけ」であります。字源を調べますと「つくり」は獣の死体を眺めている姿、「へん」は爪でそれを解体している姿であり、結局固まりやもつれを「ほどく」という語源になります。「ほとけ(佛) 〓ほどけ(釋)」であります。我々人間ははじめ「象徴的<sup>※注3</sup>ことば」の経路を持って産まれてきますが、社会的成熟とともにこれを忘れ、ほぼ「符号的<sup>※注2</sup>ことば」を用いております。ある意味そ

れは「まことのこころ」との断絶を要求されている環境です。そこでは社会に対する受動的対応と管理は賄えても、主体的営みと進化（深化）には発展し難いという事実が起きてきます。「伝わるからだ」の探求は「からだと人間（自他関係性）とそこにあることば」をほぐしほぐして、長い間もつれこわばったまま忘失しているからだを一旦ありのままにすることから始まります。この探求は近代に於いて「目に見えないものは当てにはならないもの」とされてきた事実認識の見直しでもあり、古来より脈々と受け継がれてきた実相観へのよりもどしでもあります。

声にしてこそはじめて顕われてくることばの風景※注6があり、声にしたことばの姿を捉まえる営みによってその心象風景※注7が観えてきます。

伝える（語源―背負い運び届ける）という運動の探求は、「ことばはからだの働きとして存在するもの」と意識しながら「他者への呼びかけ」をします。これによって、ことばの動き（キツカケ及び軌道と距離観※注8）をつかみます。作用面を主体に考えれば、ことばとは「心が音声という骨格をともなった微細なからだ」といいうるという事です。

もう一つの取り組みはパートナーの力を借りて対社会的自我による「からだのこわばり」をほどこきながら「自他の関係性※注10」についての認識を深めます。そしてこの二つの取り組みを経て「ひらけたからだ※注11」となって、「法華経・祖

訓・お題目」を日蓮聖人の意（こころ）をもってみんなで唱い語り、またからだ全体でその豊かなことばの響きを浴びるように聴き合います（身・口・意の統合）。ここでは「日蓮聖人の意」に参加者のピントをあわせる事が出来る「思想的導き手※注12」の存在が重要となってきました。ここで焦点を当てている象徴のことばとは「人間に秘められたものに聖なる骨格を与えてほとばしらせうるもの」。伝わる「からだ」の正体とは言語を基とし肉体の補助を受けて顕われ出た「肉質なることば」。それは「物質のことば」とも言うるもの。近代思想※注13に於いて精神とは区別された身体の事ではなく、「精神と身体という二側面を持ち合わせたからだ」であり、そしてそこから「発声によって縦横無尽に飛び回るからだ」であります。

## ☆聖なる器としてのからだの探求

ここで私がこの探求に至った経緯について報告申し上げます。

遡るに立教開宗七五〇慶讃及びハワイ開教百周年記念にて、当時の全国日青は地元開教師の協力を得、アラモアナショッピングセンター常設ステージにて日蓮宗の法式を（当時の全国日青委員長藤浩一師導師、全国日青前会長川崎俊宏師会行事にて）道往く人々に対して奉行致しました。私はこの法要への参加経験に触発され、翌年より2年にわたり地元柳ヶ瀬商店街常設ステージにて「法式伝道<sup>※注14</sup>」と銘打って（羽島市安楽寺天田泰山師・名古屋市蓮勝寺犬飼盛勝師・米原市龍王寺福山賢晃師を中心に岐阜日青会有志並びに宮崎日青会有志の協力を得て）岐阜県聲明師会に於ける教師研修事業「街角の情熱（民衆向けのキャッチフレーズ）」を実施。引き続き次の年には全国日青（川崎会長・吉田憲由海外布教担当委員長）主催にしてドイツ大聖恩寺様（竹内日祥上人・シユテフェンス祥馨法尼）の多大なご支援のもと実現した、フォコラーレ（カトリック教会信徒会）ドイツ本部とクーニツヒミュースター修道院（カトリック教会）にての、大衆に向かつての法式。帰国して間もなく岐阜県内の大学学園祭にてのステージ。そしてちょうど一年前の本日、ふたたび大聖恩寺様のお引き立てによりドイツ連邦人文科学年の学習催事としてドイツ連邦芸術ホール（ボン市内）およびプロテスタント教会（ボーホム市内）にての「祈りの祭典」に参加し、さらに五大伝統宗教教団（カトリック・プロテスタント両キリスト教・ユダヤ教・イスラム教・仏教）代表者による「環境問題」をテーマとする宗教対話シンポジウムにお集りの皆様に対して日蓮宗の祈りを披露するという、いずれも大衆へ向けての法式への参加体験を重ねていく中に、読み唱えることは出来ていても「伝える事」にはとても踏み込めていない自分に気付き、まず「人間がここに立つとはどういうことか?」「他者がそこにいるとは?」「ことばとは?」「それが伝わっていくとは?」といった数々の課題と向き合いながら、また一方でイタリアオペラ声楽「ベルカント唱法」<sup>※注15</sup>

（熊本長延寺原惠亮師裕子さんご夫妻に導かれて）にふれたことから声とからだの関係性を知り、これまでの自分の発声を捨て、福山賢晃師が計画した天下分け目の戦域供養行脚（山越え30キロ10時間）に参加し「呼吸とともにあるお題目」という課題に気付き、そして現象学から発展した「第三次言語の研究」との出会いをへて「伝わるからだ」の探求が一つの形になりました。また、毎年大阪にて開催される国際永久平和祈念祭典にて他の宗教宗派の法要を拝見したり、ドイツにてキリスト教の法要※注16に参列したことなどからも数々の気付きを得ています。これらの特殊な経験が日蓮聖人の教えと如何に結びつくか未だ明確にする段階には至りませんが、これらの「伝える」ことに重心をおいた特殊な法要体験から導き出された「伝わるからだ」の探求は、人間の日常から佛乘に至るまで、即ち「おはよう」という朝の出逢いの歓びから「南無妙法蓮華經」と本仏体中の人間と成りうる悦びに至る、全ての「伝える」行為に一貫して流れる法則の探求であります。さらに「無我でありながらも実存する自分」※注17にとつては、「自他の伝わりの断絶」は安心立命における大問題であり、教えを弘めるといふ特殊目的に於いても避けては通れない大きな課題であると確信し、伝えることに最も未熟であるが故に気付かされた事実をご紹介します。

## ☆「伝わるからだ育て」としての信行会の具体性

この取り組みは、からだそのものでありながら能動的な働きを具えた「ことば」を生み出すための思想性の充実と、受け手としての「ひらかれたからだ」※注18の深まりが最大のポイントとなります。

もともと「音」※注19とは「人の祈りに対する神の応答のあかし（声は神への呼びかけ）」※注20であり、音を奏でることは神の発音の表現であるとして、奏者は「神聖にあらざる」忸怩たる自分を音の主体たる「神」への探求に注いできました。ましてや経典（教義）の主体者（お釈迦様・日蓮聖人）への絶対の随順、つまり思想的同化にむかう飽くなき探求姿勢は信仰者としての当たり前前の姿であります。

「伝わるからだ育て」のプログラム

プロセス1、「からだのこわばり」に気付き、閉鎖性を解く

(パートナーの協力を得て無意識に行なっている動作や力みを自覚しほく)

プロセス2、「他者への呼びかけ」を通して

ことばの運動を捉まえる

(伝え手と受け手とに別れてことばの伝わりを捉まえその実態に気付く)

プロセス3、法華経・祖訓・お題目を祖意に従って

豊かに読唱誦唱する

(日蓮聖人の教えをありのままに発声することを課題とし、一句一偈の佛意を一つ一つほどきながら、ことばの骨格を鮮明にしつつ佛意との結びつきを深めまたそうして発声されたことばの風景に浸る)

我々の人生に於いて最も重要な課題は「日蓮大聖人がそのご生涯をもって示された人類の指針をその意(こころ)に忠実に実行する」ことであります。そしてこの取り組みに易しく導くツールが「伝わるからだ育て」であります。特にプロセス3における「思想的対話」が不可欠と成ります。

「唱<sup>※注21</sup>」行為に託された「うったえる」、「語<sup>※注22</sup>る」行為の「かぶれる」力を育てることを目的とし、ことばの浸透結果に重心をおいた「伝わるからだ育て」は、読経・言説・修法・聲明・社協・唱題行脚・問題解決といったあらゆる教化活動に貢献<sup>※注23</sup>するものと考えます。特にあらゆる立場における未信面の「気付き」へと易しくいざない、さらには

社会に必要とされ続けていく宗教団体へと開けていく為の一つの起因となるはずです。

## ☆教団とは別なところで発達している社会の為の宗教的とりくみ<sup>※注24</sup>

角度を変えて問題提起を致しますと、聞き手としての熟達者<sup>※注25</sup>が社会には多く存在しているという事実注目しなければなりません。すでに「伝える側の問題」に気付いた取り組みが増えて来ている。それはある意味大変好ましい事でもあります。また一方では危機感を持たねば成らない事でもあります。

カトリック教会の伝道者が共有する伝道規律<sup>※注26</sup>やヨーロッパの人々に於ける信仰に基づいた崇高なる生活姿勢<sup>※注27</sup>とキリスト教にある宗教的思想性の共有<sup>※注28</sup>に立った家庭造りにも見習うべきものがあります。また古神道・古武道・支那禅の武道面<sup>※注29</sup>などにある（呼吸法と脱力等<sup>※注30</sup>による）エネルギー循環と運動論、有機体哲学<sup>※注31</sup>における教育論、現象学<sup>※注32</sup>における思念と存在の関係性を求める臨床実験、宮澤賢治居士の生き方を実践する人達その目的を知る必要があります。

日蓮大聖人が大曼荼羅を文字式にて図顕されたことからは「はじめに言語<sup>※注33</sup>ありき」を意識せずには居れません。「南無妙法蓮華経」はお釈迦様のからだであり日蓮聖人のからだであります。今後、「社会の混乱混乱の原因特定と対策に於ける、人類に対する日蓮聖人の解答と対策にのつとつた具体的取り組み」が行なわれていない日蓮宗寺院の存在を社会は支える事が出来なくなるでしょう。住職と寺族、そしてそこへ集う者の貴重な社会的価値が問われることとなります。

## ☆むすび

今後、いっそう自我がふくれあがる方へ進む現代社会の特性を考慮した『伝わるからだ<sup>※注34</sup>育て』をライフワークとしてさらに探求を重ねて参ります。特に未信徒教化の現場にて進めて参ります。願わくば、日蓮聖人がそのおからだを

以て読まれたありのまますべてが「南無妙法蓮華經<sup>※社説</sup>」と自ら発声する処に顕われ、働き、導きを起こし、それを聴いた者が日蓮聖人の教えに対して深い深い関心を引き起こしうる、そんな一唱に至る確信を失わず探求し続ける人材が内外に育つこともこの重要なテーマであります。

最後に身延山第九十一世藤井日光法主さまのお姿をもって結ばせて頂きます。朝勤にての勸請を一仏一菩薩からだ全体を使って礼盤から乗り出しお呼びかけになられていた法主さまのお姿が、今でもわたしの目に焼き付いており、わたくしの「伝わるからだ」の探求においての大切なお手本であります。

追記 「近代的価値観そのものにある世界平和実現を妨げる大問題に気付き、その弊害を自ら主体的に脱却せしめることこそ、個人に於ける世界平和への大きな寄与である」との確信を個人から集団、社会、国家、世界へと拡大せしめることが現代社会の性質に適応した日蓮聖人の願業のおとりなしであると考えます。「ことば」にある「物質的実存的に転展する」ありのままの正体を体感し、自他の関係性を深めていく「伝わるからだ」の探求はこの重大な自己革新を助けます。宗門要職の皆様、特に教師・沙弥育成に携わる諸先生に、この点をご精査頂けますれば幸いです。

※注1 ことばは、哲学はもちろんのこと今や脳科学・社会学・舞台芸術・精神医療に至るまで幅広い分野で研究されている。2500年前プラトンは「事物とそれを指し示す名称の間には自然な関係、すなわち事物と本性の一致がある」と、単なる称名としての言語化にすでに問題を投げ掛けている。人間のコミュニケーションはヴァーバル(情報言語)では7パーセントほどしか成立せず、伝える者と伝えられる者の関係性の把握と、抑揚・リズム・シンクオペーションなどによって形成されることばの動きが具わると45パーセントに高まり、その他はすべてノンヴァーバルコミュニケーション、即ち「腹(ヴィシユラル)」である。

※注2 情報伝達の為、仮の法則にもとづいて作られることば。社会的に意味が成立する為に何千何万回と使い古されてはじ



めて共有にいたることは。個人はそういうものとして理解し制度として内なる意思とは関係なく用いる。これがなければ社会生活は成り立たない。第二次言語。過去のことば。聞き手が自分の価値観以上の意味を受け取る事には貢献し得ないという「伝わる言語」としての課題を残す。つまり、意識しない限り人間は日常的に「符号的聞き方」をしている。それは、聞き取ったことばを無意識に自分の記憶に既にある情報をあてがって思い込むため、ここからはそれ以上の意味や価値や新たな気付きは起きない。

※注3 近代において言語はこのようには理解されてこなかった。まさに今生まれ出てくることば。あることばとの出逢いによって現在の自分の心が形成され、同時にそのことばの器によって意思が行動を働きかける。自己の思考の表現とからだの実感が伴ったことば。第一次言語。現在のことば。「※注2」にある「符号的聞き方」に対して「象徴的聞き方」があり、これは過去の情報との照合をせず、むしろ棄却せしめて、いま伝わりくることばを受け容れる聞き方で、これは聞き手としての習熟課題となり広い分野でテーマとされて来たことであるが、ここでは別な側面である「伝え手が引き起こすもの」としての「聞き手の無意識なる符号的聞き方を劈開し自分の価値観以上の気付きや出逢いに直面せしめることば」について着目している。

※注4 発言することばの意味とその時の態度（本心）とが異なることを「ダブルメッセージ」と呼ぶ。連動していない状態はむしろ相手からの方がよくわかる。（三業不成問題）

※注5 自分の本心をありのままに表現したことば。本人のアイデンティティ。

※注6 ことばそのものに風景がある。たとえば「春（はる）」の「ハ」という音には生命誕生の息吹があり、「ル」には丸まる姿があって、自然界が寒さから解放された活動の始まりとそれできてまだ時折寒さが戻ること。「縮こまる」春の原風景そのものが「はる」にある。

※注7 宮沢賢治居士が用いた「心象スケッチ」は、心の中に顕われてくるイメージを詩にしたものこと。心はことばによって存在している。

※注8 経験し得ない段階ではこの意図が掴みにくい、とくにこの探求にて紹介するプロセス1、2の体験を深めた聞き手



となれば、まさにそこには発声されたことばの動作姿勢があり、ことばが空間を移動する物質的軌道と届く距離の長短を捉えることができる。

※注9 脳科学の研究によれば、肉体を静止させたまま維持する動作は、完全に運動が止まるのではなく微妙な揺れによって保たれている。これは定めた一点から大きくずれないように常に脳が計算してバランスをとっている状態で、膨大な脳による計算が行なわれている。従ってからだ（肉体と精神）のどこかにこわばりがあるということは、それだけ常に脳がそのこわばりを維持する為に無意識に膨大な計算をしている状態である。それによって鈍感となりありのままの情報に気付けないという問題がからだに起きている。

※注10 まず完全に身を委ねることで容易に脱力を得る。また最大の力みを知る事も実用的脱力を得るには必要である。他者によって自分が動かされることで、他者を知り自己を知るといふ関係性思考を深める一つの方法である。

※注11 「日常的自我」いわゆる閉鎖系分離分割という近代社会の秩序に対応するため現代人は常に自分のからだを閉鎖系にしている。それは心理的距離ともいう「違和感を感じない最も近距離」のことで個人差がある。人は他者との間に武道で云う間合いのようなこの安全範囲を無意識に設定し、そこで内外の断絶をつくり心の安定を一応は保っているが、これはむしろからだには無自覚の負担がどんどん募っていく。これを安全な条件を整えて意識的にほどく作業を行う。いわゆる「身構えをほどく」事をする、「からだ解放系」となり、多くの他人からの情報および環境からの情報を直接感じ取れる。生理学においては「皮膚は外側の臓器」「皮膚は第三の脳である」と言わしめる。ここでは特に起因に焦点を当てた紹介をしたが、勿論「ありのままのひらけ」に至るには思考価値観の質と個性こそが大きな課題である。いわゆるソクラテスが伝えた「ドクサの吟味」の様な「思想的対話」が不可欠。ただここで観えてくるものからは大いに理性的深まりへの感情面からの働きかけが起きるのも事実である。

※注12 日蓮聖人のことばは日蓮聖人の教義にある思想に基づいてことばを受取らねばならない。他のことばにおいても同様にその作者の意図を無視する事は絶対あつてはならない。思想性とは完全なる正邪の判定が明確に説明され、別次元での適応を可能とする。

※注13 近代思想に一貫して流れる原理は二項対立分離分割という理念である。このように精神と肉体を分離分割して対立的に認識することをデカルト的と呼ぶ。部分的思考に基づいて全体を観る思考。法華経は全体的思考に基づいて全体を観、部分を観る思考によって成立する。日蓮聖人の立正安国論における法然上人の浄土思想に対する問題提起も同じ論点に立ちうるのではないか。

※注14 当時、岐阜県聲明師会長として与えられた自分の役割（法式による弘宣流布）を鑑み、常に社会と民衆に向い合っていた日蓮聖人に従い、法式もその含意は法話であると位置づけ法話が苦手な教師にも取り組める辻説法ならぬ街頭法式伝道を重ねる事で、うったえる力・伝道力・空事ではない現実を直視した聴く人一人ひとりにあたたかく寄り添う説経力・聲明力・修法力を自分達が養う為の舞台として実施したもの。

※注15 イタリア語で「美しい歌唱」の意。はじめに日本に西洋声楽として輸入された唱法とは異なる。からだすべてを響かせる唱法。からだごとばを受け入れていなければかなわない。自分のからだごとばを受け入れることは伝わりうる大きなテーマである。

※注16 ローマカトリック教会は第二バチカン公会議によってそれまで本尊にむかって執り行われていたミサを、民衆の為に祈りとしての趣旨を全面に押し出して、現在のような祭壇（最後の晩餐の食卓）の向こうから大衆へ向け語りかける法要形態へと大変革を行っている。聖職者としての主体性がそこにはある。また大本山級の聖堂には常にオーケストラが控え、修練を積んだ子供が声高らかに民衆に向かって聖典の一説を歌い上げる。

※注17 自分の実態を探求すれば、自分を支える実態は自分の中にはないと判るのが「無我」の覚りであるが、それでいて事実自分は存在しているのは「縁起」、まさに他者を含む環境による存在の認知及び保護によるものである。平易に例えれば、父親は子供から「貴方が私のお父さんです」と特定されることでまぎれもなく父親としての存在が生じる。上位から下位に対して向けられる報恩道徳がないことは現代の社会問題に反映しているのではないか。

※注18 伝える立場に立つ人においてとかく見落とされやすい、受け手となって「ひらけたからだ」になり他者からの伝わりを感じ取れるという習熟をすることは、伝えることは伝えられることと考える「統合的からだ育て」の基本である。

※注19 字源に基づけば、まず「口」はサイとも読み神への誓いの言葉を入れる器、それに嘘偽りの無いあかしを立てた形が「言」。そしてそれに神託が下った証としての「音」は「口」の中に、をいれて「日」とし表現している。ヨーロッパ人は雅楽器の音を聞いて「これはまったく山野自然界から聞こえてくる音」と評価している。※注31・35参照

※注20 「声」は「磬」「磬」に由来し、神を呼ぶ為の道具とした。

※注21 「うたう」ことは自分の思いを訴えるということばから生まれた動詞。

※注22 「かたる」は相手に自分の思いを伝染させる「かぶれさせる」を源とする。

※注23 たとえば私自身、これまで法話の内容における情報的価値の高さや説明力といった技術が、相手に好まれ受け入れられる要素としてこれらの向上と向かい合ってきたが、意外なことに「発声されたことばそのものの物質的作用」が左右しているという盲点に気付いた。これはまさに「伝え手次第」という面白みを生む。

※注24 ここでは「宗教」を、「妙なるからだでありながら自ら知らず働きえない凡夫が、佛の教えに依ってそのからだをかなえていく取り組みを重ね、まったたく実相と一如するからだを得るといふ『未完成から完成への要路を明らかに示す』取り組み」と玄義に基づいて捉えたい。

※注25 ことばの運動をリアリティに洞察認知する研究やワークショップが増えてきている。

※注26 一例を挙げれば、カトリック教会の伝道者間には、一定の年数周期を決めて一通りの聖書の朗読と解説を信徒達に説き伝えなければならないという約束を共有している。

※注27 ドイツでは「神および神聖なる存在」を信じせしめる思想的説明を含めた宗教教育は学校で家庭できちっと取り組まれていて、子供が納得することばを大人はもっている。

※注28 「日蓮聖人の研究」におけるただ一人の文学博士である山川智應師はその著書のなかで、「両教の歴史的邂逅」として日蓮聖人の宗教とキリスト教の中核的思想性の共通点を対照的に表現され、互いの宗教思想における社会的役割を示されている。

※注29 よく知られる座禅ではなく武術的運動によって伝承された禅の思想のこと。

※注30 北京五輪陸上競技メダリストのフサインボルト氏や日本の末續慎吾氏などは、過去の同種目メダリストであるアメリカの選手等とは根本的に走法が異なる。それは第一に「脱力」である。筋力は動きのキッカケとあるべき軌道を進む為の微調整のみに用いるものと考ええる。

※注31 すべての宗教はこれに基づく。オーガニックシステム。自然界の構造原理をお手本としてあらゆる組織系を理解しようとする。教育学へはゲーテの思想からの発展がある。かつては洋の東西を問わずすべての学問の主軸はここにあったが、近代の主流は機械論哲学。ちなみに地球の自転によって生まれる音は西洋音楽で捉える「ソ音」で、人間のDNAはこの周波数内で最大共鳴する。日本の音律が「宮」を中心に構成されていることは、日本文化が自然からの情報と常に呼応して来たことのおかげ。

※注32 世界がすでにあるとしながら、それを否定し「世界が成立する過程」も同時に繰り返されていることに焦点を当ててあらゆる存在を現象としてとらえ、特に信念と思考と想像と展望と経験によってどのように構成されるのかを探求する。なかでもメルロポンティは「存在の両義性」を唱え「自他は同一の系に属する二つの項である」と一念三千の概念に近い説を述べている。

※注33 ことばなしにはいかなる意識も可能ではない。ことばとは思念を発声したのではなく、意識はすでにことばとしてあり、むしろことばとの出逢いによって思念は表現しはじめ、ことばとの出逢いによって意識は形となって実現すると考える。

※注34 私自身のこの取り組みによって得られた成果を一つ紹介すれば、このプログラムにて法華経を読む中で、日蓮聖人に於ける上行自覚の文証に気付くという法悦を体験している。

※注35 ご本佛の五重玄義の具わった五字七字の発声。すなわち「名」のみではなく「用（はたらき）」「体（すがた）」「宗（導き）」「教（からくり）」が発声するところにありのままに実存し、新たな仏乗連鎖のはじまりを具体的に引き起こす。光明点を仏界言語の伝わりとした探求。古来インドでは『太陽の光』をすべての音の父『#ド』として聞いていた。この取り組みはお題目のみならず諸教典・念仏はもとより、あらゆる聖人のことばから日常会話にいたる「人の発声するすべてのことば」をここに止揚せしめたい。